「臨床」という言葉の意味に関する一考察

栗　原　輝　雄

要　　旨

近年，医学以外の分野で「臨床」という言葉がよく用いられている．しかし，これらの分野（領域）で用いられているこの言葉の意味については，必ずしも明確に定義されているとは言い難い面があるように思われた．心理臨床や，教育臨床，発達臨床等に携わる筆者自身にとって，その意味で，少なくとも自身の研究や実践等における基盤をより強固なものにしていくためにも，この「臨床」という言葉の意味を筆者なりに考察しておくことは大切な課題である思われた．

このようなことから，「臨床」という言葉の意味について，先達の所論や，「臨床」という言葉を構成する「臨」と「床」という文字の語源的意味に関する吟味や，その他の関連諸文献等の考察などを通して検討を行った．その結果，「臨床」という言葉には次のような意味のあることが示唆された．

「臨床」とは，関係によって創造されるものであるということである．つまり，今目の前にいる一方の人に，もう一方の人が，人として向き合うことによって，その人に，人として受けいれてもらう．このようなことを通して，双方の人の間に，人と人としてのかかわり合いが創造される．この，人と人としてのかかわり合いの中で，手を携え合いながら（寄り添って），必要な課題に取り組んでいく．これが「臨床」ということの基本をなす意味である，ということではないかということである．

今回の考察は，言わば「臨床的関係」という点に焦点が当てられるようなかたちになったが，今後は，さらに多方面からの考察を深めていく必要があると考えられた．

Ⅰ　問題および目的

「臨床」という言葉は，もともと医学で用いられてきた言葉であるといわれているが[1]，近年は医学の分野（領域）を超えて，他のさまざまな分野（領域）においても広く使用されている．筆者の関係している，教育や心理の分野（領域）に限っても，たとえば，「教育臨床」[2]，「心理臨床」[3]，「発達臨床」[4] 等々の呼称を見出すことができる．これらはいずれも「臨床」的な視点に立って，教育や人間のこころ，発達等々の諸相・課題・問題等々を明らかにしつつ，一人ひとりの子ども（人）のニーズに見合った適切な支援をすすめていくことを目指しているという点では共通の基盤の上に立っていると考えられる．

このように，医学以外の分野（領域）でも広く用いられるようになったこの「臨床」という言葉であるが，この言葉が医学以外の各分野（領域）でどのようにとらえられ，どのようなところにそのまなざしが向けられているのかといった点（「臨床」という言葉が意味するところ）については必ずしも明確にされているとは言い難い面があるように見受けられる．（筆者の不明のいたすところであるとすればお許しいただきたい．）

筆者自身も「臨床」という言葉を冠した分野（領域）(心理臨床，発達臨床，教育臨床）で研究・教育・支援等にかかわっている．このことを考えたとき，筆者自身がみずからの依って立つ基盤，視点，目指すところ等々を折々確認しながら歩をすすめていくためにも，この「臨床」という言葉のもつ意味につき，筆者なりの理解と整理をしておくことは大切なことであると考えている．本論文のテーマと目的とするところはこの点にある．

「臨床」というこの言葉の意味について考察を深めるという作業を行うことで，「臨床」的視点から，今後，さまざまな問題や課題，支援等に取り組んでいくにあたり，新たな見方や発見，気づきなどが与えられるのではないかとのひそかな期待をも抱いている．

Ⅱ　「臨床」の意味について

上記「Ⅰ．問題および目的」のところで，医学以外の分野（領域）でも近年，「臨床」という言葉がよく用いられているが，その意味については，必ずしも明確に規定されているとは言い難い面があるようであると述べた．

とは言え，そのような中にあって，藤原（1992）[5] や大塚（2004）[6] などによる「心理臨床学」の立場からの論考には，「臨床」という言葉（事柄）の意味についての考察をすすめていくにあたり，その土台あるいは拠り所となると思われる大切なことが，著者それぞれの言葉を通して提示されているように考えられる．

藤原（1992）[7] は，「心理臨床の方法の出発点」は，「なま身の生活者としての人間の心にある」とし，「なま身の人間と人間の『相互関係性ないし相互関与性』」が重要な意味をもつことを示唆している．その意味で「心理臨床学の基本的な方法は『面接法』である」と述べている．

大塚（2004）[8] は，藤原（1992）[9] と同様，心理臨床学の立場から，「臨床の原点」とは「病もうが，病むまいがその人の息づく姿に直接関わって，その事実（実態）に，どう寄与するかの人間的行為そのものである．」「臨床とは（中略）生身の尊厳をもった個別的な人間に直接関わることを意味する」と簡潔な言葉で説いている．

上記，藤原（1992）[10] の所論からも，大塚（2004）[11] のそれからも，「臨床」という言葉（事柄）は，人と人とが「相互」に「関係（関与）」し合い，「直接関わ」り合うことを基盤として成り立つものであることが示唆されているように考えられる．そして，筆者なりの考察をすすめていくにあたってのいくつもの重要なメッセージを発信してくれているように思われる．それらのうち，筆者なりに強く感じ取らせてもらったところを以下に要約してみたい．

①「臨床」とは，あるいは「臨床」的であるということとは，「なま身の生活者としての人間」[12]，「生身の尊厳をもった個別的な人間」[13] を対象として

いるということ．したがって，そうである以上，深く目を注がれるべきは，今，自分が向き合っている人それ自体に対してである．「なま身の生活者としての人間」[14]，「病もうが，病むまいがその人の息づく姿」[15] にこそ深い関心を寄せる，そのような感性を豊かに備えていることが「臨床」においては根本的に必要とされている．

②そのような「個別的な人間」に関わる関わり方としては，「直接関わること」であるということ．[16][17] それは言い方を換えると，「その人に」「自分の全体を向けるということ」[18] であり，「生きた出会いである対話を通して」[19] なされるものであると考えられる．

③「その人」に「直接関わること」によって，「その人」の「事実（実態）」を感じ取る（感じ取らせてもらう）ことができた場合，その「事実（実態）」をどのように受けとめるか，また，その「事実（実態）」に対し，その人が何らかのニーズをもっているとしたら，そのニーズの実現に向かって，どうしたら「寄与する」ことができるか[20] を，その人とともに考え追求していくことが重要である．

上記の三点にはまた，それぞれに，さらに考察を必要とする深い意味を有するキーワードの数々が含まれていると思われる．筆者もまた「臨床」に携わる一人である．このことからすると，筆者自身の今後の「臨床」活動に対するより確かな足場固めを得るためにも，これら三点の意味するところについてのなお一層の掘り下げを，筆者自身の言葉（とらえ方）によってはかっていくことを，課題としてみずからに提起されているように考えられた．

Ⅲ「臨床」という言葉についての筆者の考察

―「臨床」という語を構成する「臨」と「床」という二字の意味の吟味から示唆されること―

英語の“clinical”という言葉は，「患者の治療に関する」あるいは「観察されたサインあるいは症状にもとづいた」という意味の形容詞であるとされている．[21] これが「臨床の」[22] という日本語に翻訳された経緯については筆者には不明である．本来ならば，“clinical”という英語がなぜ，「臨床の」という日本語

に置き換えられたのかということについて明確にしておく必要があるであろう.

したがって，その意味では考察上の粗さが残る感のあることは否めない．この点は今後の課題として考慮に入れておく必要はあるであろう.

それはそうとして，すでに述べたように，

①近年,「臨床」という言葉が医学以外の，心理・教育・発達等々の分野（領域）においても頻繁に用いられていること.

②しかし，反面，この言葉の意味するところが，必ずしも共通理解のうえに立っているとは言い難い面があるように思われること．そして併せて，

③この言葉の意味するところに正面から取り組んだ論考等も必ずしも多いとは言えないのが現状ではなかろうかと思われること，

ということなどを勘案すると，この言葉の意味するところについてのなお一層の掘り下げと共通理解のための検討は,「臨床」に携わるもの一人ひとりに課せられた大切なテーマではないかと思われる．すでに記したように,「臨床」に携わる筆者にとっても，これは同様に自身にも向けられた，取り組むべき大切な課題であると考えている.

なお，この課題への取り組みについては，さまざまな観点からの考察・検討が可能であると思われるので，筆者は筆者なりの観点（切り口）から考察・検討をすすめていくことにしたい．それが，筆者にとっての,「臨床」という言葉の意味の理解と確認にもつながっていく，と考えられるからである.

「臨床」という言葉を構成する「臨」と「床」という文字（漢字）に着目し，それらのもつ意味を辞書によって吟味してみると，それぞれの文字（漢字）の中には実に幅広く，かつ深い意味が含まれていることがわかる．これらの文字（漢字）それぞれが有している意味を仔細に検討してみることによって,「臨床」というものの姿（イメージ）がより一層明確に浮かび上がってくるように思われた．これが，上に述べた筆者なりの観点（切り口）から，ということのひとつである.[注1]

以下に述べることは，こうした観点からの筆者による「臨床」という言葉（事柄）についての検討・考察である.

１．「臨」という漢字のもつ意味についての吟味

漢和辞典によると，「臨」という漢字は「見おろす意の臥（が）と音を表すとともに，多くのものを分ける意をもつ品（ヒン）（リンは転音）とから成る．のぞみ見て見分ける意を表す．」とされ，「高いところから下を見おろす」という上下の位置関係を示す意味があると考えられているが，一方ではこうした位置関係を離れ，「目の前にする」「移す．見てうつす」意味もあるという．[23]「対する．むかう」という意味[24]や，「まみえる」[25]の意味も掲げられている．

最後に紹介した「まみえる」という言葉は「『会う』の意の謙譲語」で，「おめにかかる．お会いする」の意味をもつという．[26]「臨」には広く，自然や人，物，事柄等さまざまな対象とのかかわり方をあらわす意味があることがうかがえるが，特に人が人に対するかかわり方（関係）を考える場合，「まみえる」という意味は，次に続く「床」という漢字の意味（後述する）と重ねてとらえたとき，人が人に対して接していくにあたっての大切な姿勢を示唆してくれるものがあると思われる．注目しておきたい．

２．「床」という漢字のもつ意味についての吟味

次に，「床」という漢字の意味について，これまた漢和辞典をもとに吟味してみたい．

この「床」という文字は「家を意味する广と，（中略）寝台の意を示す牀ショウの省略形木からなる」と言われ，「『寝台』または『ゆか』の意」であると説明されている．[27] この説明から筆者が感じ取ったことは次のようなことである．すなわち，「床」とは，＜人の生活の場，心身の安らぎ・癒しにとって大切なところ，外の世界から守られ，安心してあるがままの（素顔のままの）自分でいられる世界＞というようなあたたかなイメージを抱かせてくれるということである．

なお，「床」とは，「安身の座」であると説明している辞書もある．[28]「安」には「物事が静かで治まっている」「心配がない」「おちつく」の意味があり[29]，「身」には「からだ」「自分」といった意味があるといわれている[30]ところからすると，「安身」とは，自分が心身ともに落ち着くというような状態を指してい

ると考えることができそうである．「座」とは，「すわる場所」「物をすえておく場所」「場所」といった意味をもつ言葉[31]であるという．となると，結局，「安身の座」とは，人を落ち着かせてくれる場所，人を根底において支えてくれるところ，Ｊ.ボウルビイ（John Bowlby）の言葉を借りれば，「安全の基地」[32]というようなものをイメージさせる働きをもつものを指している，ととらえることができると考えてもよいのではないかと思われる．

以上のことからすると，「床」という言葉には，①安全な場で，人がもっとも落ち着いていられる場であるという意味とともに，②人が素顔のまま，ありのままの自分（姿）で生きている状態という意味とを（つまり，場と状態の双方の意味内容を）同時に含んでいる言葉のようである，と考えることができそうである．

３．「臨床」という言葉のもつ意味についての吟味

「臨」という漢字と「床」という漢字双方の意味についての以上の吟味をもとに，これら二つの漢字の組み合わせからなる「臨床」という言葉の意味について，さらに吟味を重ねてみることにしよう．

上記二文字の意味の組み合わせからイメージされる内容として，どのようなことが浮かび上がってくるであろうか．

「臨床」という言葉が意味するのは，素顔のままで，落ち着くことのできる状態にあることを保障された，安全で守られた空間（「床」）に，ある人がいる．そこに，他のある人が（招かれてか，自発的にか，あるいは役割としてかといった動機（理由）的なことについてはともかくとして）その人のもとを訪れて，その人に「まみえる」ということ（「臨」）である．安全で守られた空間はたとえて言えば，その人の「住まい」「家」のようなものと言ってもよいであろう．

「臨床」とは，以上述べたところからすれば，落ち着く場所をもち，素顔のままでいることができ，なおかつ，安全・安心を最大限に保障されたみずからの「住まい」（「家」）に身を置くある人（たとえば，その人をAさんと呼ぶことにしよう）に対して，他の人（その人をBさんと呼ぶことにしよう）が「まみえる」（「臨」）ことなのだというわけである．BさんがAさんに「まみえ」て，そこでA

さん，Bさん相互の間に何が起こるか，どんなことが生まれるか．これが重要なことである．これはひとえに，BさんのAさんに対する「まみえ」方にかかっているということであろう．

BさんのAさんに対する「まみえ」方が，Aさんにとって心地よい（安心できる）ものであれば，AさんはBさんをみずからの「住まい」に招き入れてくれるであろうし，その後の状況いかんによっては，AさんはBさんに心を開いてくれ，両者の間には心のつながり，つまり「関係」が構築されていく道筋（基盤）が作られていくことになるであろう．[33]

このようにして生み出されたこの二人の人の「関係」のあり方こそが，「臨」と「床」という二文字で構成される「臨床」という言葉の意味するところであり，「臨床」的かかわりというものは，そのようにして出来上がっていくものを指して言うのではなかろうかと筆者は示唆を受けた．

４．「まみえる」ために求められること

上記のことを，もう少し具体的に順を追って考えてみよう．

安全を守られているがゆえに素顔のままで落ち着いていられるある人（以下，Aさんと呼ぶ）の「住まい」（「家」）を，ある人（以下，Bさんと呼ぶ）がAさんに「まみえる」ために訪れて行ったとしよう．「まみえる」動機・目的等はいろいろであろう．そして，その動機・目的にかなったように事が進行するかどうかは「まみえ」たあとで判断されることである．「まみえ」方いかんによって結果に大きな変化が生じることになると考えなければならないことはもちろんであろう．

しかし，それはそうとしても，「まみえる」ということがかなわぬ限り，話は先に進んでいかない．したがって，さしあたっての大きな課題は「まみえる」ことがどうしたらかなうかということになるであろう．Bさんはどのようにしたら，どうであったら，Aさんに「まみえる」ことが可能になるであろうか．

このことを考えるとき，マルティン・ブーバーの「我と汝」に関する考察の中に大きな示唆を得ることができるのではないかと思われる．[34] たとえば，「相互性の関係」について考えるとき，「両極的な関係にある自己の極だけに立つの

ではなく，（中略）眼前に思い浮かべる力でもって他方の極にも立」って考えることが重要である，というような指摘である．なるほど，Aさんの立場に私たちがみずからを置いて考えてみると，Bさんのあり方がどうであったなら，Aさんにとって，Bさんが自分に「まみえ」ようとしてくれていると感じられるかが，より具体的に考えていきやすくなるのではないかと思われる．

言葉を換えて言えば，こういうことである．つまり，Aさんの側に身を置いて見たとき，BさんはAさん自身の「人格に対し」，自身の「人格で向かい合う態度によって」Aさんに関わろうとしている，とAさん自身によって感じ取られるかどうか，ということである．Bさんの「人格的に向かい合」う態度がAさんに向かってどの程度あるいはどのように働いているかが鍵になるということであろうか．[35]

「まみえる」ことは，ホアン・アン・M.サンチェス＝リベラの所説[36]を参考にすれば，「他者と向かい合うこと」，「自分の全体を向けるということ」であり，「自分の注意を相手の（中略）『生きた存在』そのものへ向けることである．」そして，それはこうしたことを通じて，「そこに具体的に存在する人間を受容することである．」と言い換えることができると思われる．それほどに相手の人に「まみえる」「おめにかかる」ということには深い意味が含まれているのだと言えよう．そしてさらに，一方の人が他方の人に「まみえ」，そのことを通して相互の人の間に「相互に相手の方に向かい合っている」という態度（関係）が成り立ったところに，真の意味の「対話」は成立するのだ[37]，ということも心に留めておく必要があると思われる．

AさんとBさんの関係に話をもどして，BさんがAさんに「まみえる」ためにどのようなことが求められるについてさらに考察を進めていくことにしたい．

一軒の家がある．その家の中には人が身を横たえることのできるベッドがあったり，ゆったりとくつろぐことのできるソファーが置いてあったり，あるいは脚を曲げたり伸ばしながら座って休める板の間あるいは畳の間がある．そして，その家の主（あるじ）である一人の人（Aさんとする）が，その時々の気分に合わせて，さまざまなスタイルで時を過ごしていると考えてみることにし

よう．まさに「安身の座」にあるわけである．自分の家であるから，守られた空間の中にある．Aさんは誰に気兼ねすることもなく，安心して素顔のままの自分でいることであろう．

そこに一人の人（Bさんとする）が訪れてくる．Aさんがみずから呼んだのかもしれないし，Aさん以外の人が依頼したのかもしれない．あるいは，Bさんみずからが自分の意志でAさんのもとを訪れてきたのかもしれない．ケース・バイ・ケースで考えていく必要があろう．

Aさんが第三者の勧めにもとづいて，Bさんの来訪を望んだと仮定してみよう．しかし，この場合も，AさんとBさんとは全くの初対面であるか，既知の間柄であるかの違いをも考慮することは必要であろう．仮にAさんとBさんとは初対面の間柄であると想定しておこう．

Aさんはいつものように，素顔のままの状態で，安心した気持ちで家の中でくつろいでいる．そういう状況のもとにあるAさんのもとに，初対面のBさんが訪れる．Aさんに対しBさんが来訪の意を伝えたとしても，AさんにはBさんは未知の人である．Bさんを知る直接的な手がかりは何ら持ち合わせていない．BさんがAさんに「まみえる」ことができるかどうかを考えたとき，まずさしあたって問題になることは，Aさんが家の扉を開けて顔を見せてくれるか，あるいは家の中に招じ入れてくれるかどうかである．もちろん，「家」というのはシンボリックなものとして考えることができるから，Aさんが招じ入れてくれるのは「物理的空間」としての「家」の中にということにとどまらず，「心理的空間」としての「こころの世界」の中にということをも含む二重の意味があることを考慮に入れなければならないのはもちろんのことである．

とりあえず，「物理的空間」としての「家」(建物，部屋等）の中に招じ入れてもらうという場合について考えてみよう．どうしたら，Aさんは「家」の扉を開けてくれるであろうか．そしてさらに，どうしたら，BさんはAさんの「家」の中に招じ入れてもらう（「まみえる」）ことができるであろうか．Bさんにとっては，ここのところが，まずくぐらなければならない第一の関門である．

主として防犯上の目的のためであろう．現在では，来訪者とのやりとりが家の中からできるようになっている種々の機器が門柱や玄関などに設置されてい

る家庭も多い．Aさん宅にもこうした機器が設置されているとしよう．Bさんが玄関先に立ち，来意を告げたとする．

この時，問題になるのは，Aさんから見て，Bさんは鍵をはずして玄関の扉を開けても安心できる人と思われる人であるかどうか，ということである．日常生活で，おそらく誰もが経験的に感じていることであろうが，訪問者は訪問相手に，不安や不快な感じを与えない，もっと言えば，さわやかな香りがただよう，好感の持てる訪問の仕方（出会い方）を身に付けているということが大切であると思われる．このAさんとBさんの関係についても同様であろう．

であるからこそ，来訪者はきちんとした礼儀作法（来訪マナー．単なる形式に終わるものではなく，人として相手を尊重し心配りをするといった精神に裏打ちされたもの）を備えていることが何よりも大切なのである．「いちばんたいせつなことは，目に見えない」[38] ものであるかもしれないが，人はこれを，相手の人の中に，いわば直感的に見て取り，自分に対する相手の人の，人としての姿勢・あり方を感じ取っていくのであろう．人が自分以外の人に接するとき，上に記したようなことを大切にしていく感性を，みずからの心の内側を常に膨らませ磨いていく努力を惜しんではならないであろう．相手の人がどのような状態にあるか，どのような特性等を有しているかなどにかかわらず，その人も自分と同じ一人のかけがえのないいのちをもった人間であるという一点においてまったく変わらないという認識に支えられながら．[39][40]

さて，AさんはBさんの全体としての印象に好感（安心感）をもち，Bさんに対し信用の念を抱き，「家」の扉を開けてくれたとする．BさんがAさんに「まみえる」ことができ，さらに，Aさんがもうひとつの「家」の扉である「心の扉」をも開いてくれ，AさんがBさんとの間によい関係（Aさんが求める関係・かかわり）を作り上げていくためには，このあと，どのようなことが，Bさんに求められることになるであろうか．以下，順に，思いつくままを記してみよう．

①Aさんに「まみえる」ことで，Aさんにその素顔を出してもらえるためには，Bさんの，人に対する心配りや姿勢（人としての礼儀作法あるいは品性ということで，Aさん個人に対するという限定的なものではない．どの人に対しても共通して表されるものと考えたい）というものがまず，問われ

ると思われる．Bさんの内側にそうしたものがどの程度，日常生活の中で培われてきているか．これが，もっとも基本的な事柄であろう．こうしたものがAさんに，しかと伝わっていくことが不可欠である．そして，時間というものもAさんの素顔が表出されるためには当然考慮に入れなければならないことである．(注2)

②AさんはBさんの人としての心配りや姿勢を徐々に感じ取り，Bさんという人に対する信頼感が自分の中で生まれてきたとき，その度合いに応じてBさんに対して自分の素顔を少しずつ表すことができるようになる．

③BさんはAさんの素顔にふれて，Aさんの心の状態（思い）を自分の心に「うつす」(注3) ことができるようになる．このことによって，BさんはAさんの存在それ自体を自分の中にしっかりと位置づけることができるようになる．言い換えれば，Aさんとの間に「つながり」の糸が作り出される．

④Bさんは自分の心に「うつ」しとったAさんの心の状態（思い），さらには，人としての思いを大切に受けとめる．そのことを通して，Aさん自身の思いが実現され，家の内外で豊かに生きていけるように，寄り添いつつ，共に人としてのよりよい歩みを続けていく．

以上のような意味合いにおいて，「臨床」とは，その人の素顔に「まみえる」ことを許される―これが最も重要なことであると筆者には思われるが―ことにより，「その人の息づく姿に直接かかわって」，その素顔が示している「事実（実態）」を感じとり，「その事実（実態）にどう寄与するかの人間的行為そのものを意味」するというとらえ方[41] に到達する．

ところで，以上の場合とは逆に，AさんがBさんによい印象をもてなかった場合を想定してみよう．AさんはBさんを「家」の中に招じ入れることをせず，Bさんの来訪は実を結ぶことなく終わりを迎えることになるであろう．BさんはAさんに「まみえる」ことはできず，「臨床」という状況―「他者と向かい合う」[42] 関係―それ自体が生じないことになろう．

自分がBさんの立場であったとしてみよう．大事なことは，Aさんの立場に

立って，自分がどうであったらよいかについて考えを進めていくことであろう．Aさんが自分に対して信頼感・安心感を持ってくれるためには，Aさんにとっては何が大切なことになるであろうか，Aさんとしては何を求めていると思われるかといったことを，しっかりと考えてみるということである．つまるところ，自分がAさんの立場であったらどうであろうかという観点に立ち続けながら，みずからのあり方，姿勢を問い直しつつ，実践に移していくということに努めることが大切だということであろう．

5．「まみえる」ことが示唆するもの

BさんはAさんを「目の前にする」ことができた．このことは，Aさんの側からすると，自分の素顔を覆っていた覆いがAさんから外されたことによって生まれた状態であるということであろうから（言い換えれば，AさんとBさんの間を隔てていたAさん側のフィルターの透明度が上がったということだとも言えそうなので），結果として，AさんもBさんを「目の前にする」ことができたということであろうか．AさんとBさんとの間には顔を合わせる機会が生まれたということである．（「臨」には「目の前にする」という意味も辞書[43]には記されている．）

このように互いが互いを「目の前にする」ことは顔と顔を合わせること（直接ふれあうこと）であり，文字通り，「面接する」という言葉が表す状況が生まれたということを意味するのであろう．「面接とは『出会い』である」と神田橋（1994）[44]によって述べられている通り，AさんとBさんとの間には，こうして「出会い」が生じたということになるであろう．

なお，「面接」とは「直接その人に会うこと」[45]であるとされているが，この語の「接」には「手をとりあう」「つなぐ」「まじわる」「もてなす」等の意味があるとされる[46]ところからすると，AさんにBさんが「出会う」ことができたことは，AさんとBさんとが「つな」がる，「手をとり合う」関係が生まれたというふうに考えてよいであろう．

こうして，BさんはAさんの様子を自分の心に「見てうつす」[47]ことが可能になってくる．この「見てうつす」ところにBさんの感性や人間性等が大きく物

を言うことになるのであろう．このＡさんの様子を自分の心に「見てうつす」ことによってこそ，ＢさんはＡさんの内側の状況や思い等々がどのようなものであるかについて，意味やニーズ等々を感じ取り，一人の人間として，Ａさんに対して，もし，自分に何かできることがあるとしたら，何ができ，どのようなかかわり方があるかをみずからに問うことになるのであろう．

以上のことを踏まえると，心理臨床，教育臨床，発達臨床といった分野（領域）にかかわる人々（筆者も含めて）に求められる基本的なスタンスあるいは立脚点，視点といったもの―要するに，「臨床」的であるとはどういうことであるかということ―が，おのずから浮かび上がってくると思われる．端的に言えば，「臨床」においては「人対人という関係」がもっとも大きな意味をもっているということ．この関係に立つことに努めたからこそ，今，目の前に自分が「まみえる」ことを許してくれた一人ひとりの人がいる．このような人との関係の中でこそ，それぞれの人の，そして人間としての心の世界のありようや教育的ニーズ・発達的ニーズ等がどのようなものであるかを直接教えてもらうことができ，想像力を十分に働かせることにより，自らの持てるものをもって，それぞれの人に，それぞれの人に最もかなうと思われるかかわり（あるいは支援）をさせてもらうことができるようになるということであろう．

以上のようなことが，「臨床」的スタンスについて筆者のたどり着いた現時点での考え方である．

Ⅳ　「臨床の原点」ということについての再考察

―心理臨床，教育臨床，発達臨床を進めていくうえでの課題―

「Ⅰ問題および目的」のところで，藤原（1992）[48] および大塚（2004）[49] の「臨床」ということについての所論から筆者が受け取った重要なメッセージとして三点を挙げた．そして，「臨床」に携わる筆者にとっては，これら三点の内容を自らの課題として，さらに深く考察していくことが，少なくとも筆者自身の「臨床」の足場をなおしっかりとしたものとするために必要なことであると考えていることを述べた．ここでは，これら三点についての筆者自身のさしあたってのとらえ方を以下に記してみることにする．（これら三点は内容的に複

合した部分を含んでいるので，ここでは，以下の二項目にまとめて述べることにした.）

なお，これら三点についての考察は今後もさらになお掘り下げをはかっていく必要のある重要な事柄である，と筆者は認識していることを付け加えておきたい.

1.「深く目を注がれるべきは『その人』そのものに対してである」

これが，上記三点のメッセージのうちの第一点目であった．この点について筆者の所感を記してみよう.

BさんがAさんに「まみえる」ことができたのは何によってであろうか．それは一言で言えば，BさんがAさんを人として受けとめ，人としての礼儀作法（マナー）をわきまえてAさんに向かい合った．そのBさんの姿勢がAさんの心に感じ取られた（通じた）からだということができよう.

「感動は心の扉をひらく」[50] と記した人がいる．日常の人と人とのかかわり合いの中での，何気ない言葉や所作等が互いの心に響くこともある．これも「感動」といえば「感動」であろう．上に紹介した言葉は，人間相互の向き合い方の大切さと，その向き合い方によって「心の扉」の開閉は大きく左右される，ということに留意することの重要性を示唆してくれていると思われる.

さて，BさんがAさんの「家」を訪れた．この場合，Aさんにとっての「家」とは，それが全ての人に対してそうであるように，Aさんに対してもその身を外的世界のさまざまな危険から守ってくれ，安全で，安心でき，かつ快適な生活を送れることをAさんに保障してくれる住居（物理的空間）の意味合いをもつものであることは言うまでもなかろう．もちろん，私たちが体験的に知っているように，「家」とは住居，住まいとしての物理的意味だけではない．人がそれぞれにあるがままの状態でいることができ，安心してみずからを生きていくことができるよう保護してくれる世界（精神的空間），換言すれば，「無防備な自分をうしろから守ってくれる」「うしろだて」としての「不動の地盤」[51] という意味合いで考えることのできるものもある．ジョン・ボウルビイ（John Bowlby）の言う「アタッチメント」「安全の基地」などもその一例であ

ろう.[52]

そして，物理的な意味であれ，精神的な意味であれ，そのどちらにおいても，「家」には外的世界との間に「扉」が設けられていて，危険を察知したときにはその「扉」は固く閉ざされ，反対に安全と感じられたときには，その「扉」はおもむろに開けられるという具合に，その「扉」の開閉は，他ならぬその「家」に住むその人自身の手にゆだねられているということであろう．他者が力任せに無理やり開けたら，開くという性質のものではない.[53][54][55]

話を元に戻そう．ＢさんがＡさんの「家」を訪れた．そのとき，ＢさんはＡさんがその「家」に招じ入れてくれるような接し方でＡさんにかかわろうと努めた．その結果，Ａさん自身の手によって，「家」の扉を開けてもらうことができ，Ａさんに「まみえる」ことがかなった．（ＢさんはＡさんと直接，顔を合わせること，すなわち，「出会い」を許された.）

こうした状況（関係）の中にあって，BさんがAさんの心にかなった（Bさん主導ではなくAさんの側に立った）かかわり方でAさんと交わることができれば，そのかかわり方に応じて，BさんとAさんとのコミュニケーションは広がりと深まりとを持つことが可能になる．その結果として，Aさんはみずからの思いやニーズをBさんの提示してくれることになるであろう．こうした関係の中で，BさんはAさんに求められていることについての理解の目が養われ，BさんがAさんに対して応答しうる内容等がしだいに明確化してくる．こうして，AさんとBさんとの関係が深まれば，両者の間にはより一層強いきずなが作り上げられていくであろう．AさんとBさんとの間に予想されるその後の展開のひとつの姿である.

このようにして，AさんがBさんの人物像，自分にとっての存在の意味等を感じ取り，他方，BさんもAさんという人物やAさんの思いやニーズ等にふれることができ，これらを実現していくために，Aさんとどのように協働関係，言い換えれば「寄り添う」関係[56]を作り出したらよいかについて，Aさんとのかかわりの中で感じ取らせてもらっていく．このようなことが，AさんにBさんが「まみえる」ことで形を成してきたとすれば，それこそ，「臨床」の関係が生まれたということを示しているのであろう.

この「臨床」的関係の創造ということは，少なくともBさんにとっては，中村（1992）[57] の説く「臨床の知」に導かれた営為であったと言ってもよいであろう．ちなみに上記中村（1992）は「個々の場所や空間の中で，対象の多義性を十分に考慮に入れながら，それとの交流のなかで事象を捉える方法」，「個々の場合や場所を重視して深層の現実にかかわり，世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り，捉える働きをする」のが「臨床の知」である，と述べている．BさんはAさんに対し，人としての礼儀作法（マナー）をもって接したからこそ，そして，このことにより，Aさんの安心感・信頼感を得ることができたからこその結果であったと考えてよいのではなかろうか．

ここに，先述した「臨」の意味のうちの「移す」「見てうつす」[58] ということが，前記，中村（1992）[59] の「臨床の知」と深くかかわっていることを改めて感じさせてくれる．すなわち，「移す」とは，視点あるいは視線を「移す」ということでもあり，「見てうつす」とは，大事な部分，肝心なところをおさえて，心に感じ取るという行為のことであると理解することができると思われるからである．[注4] いずれの場合も，体も心も，相手の人のほうに真っ直ぐに向いているということをイメージさせてくれる．

人としての礼儀作法（マナー）をもって他者に接するということの大切さについては，「臨床」に関わってきた多くの先達たちが等しく説いているところである．たとえば，岡村・飯渕（2004）[60] は，「クライエントの世界に入っていく傲りではなく，招かれた客としての謙虚さが求められている」と記している．このとらえ方は，「臨床」の「臨」とは「お目にかかる」という意味があり，この姿勢があってこそ「臨床」というものは始まる話である，と筆者が先に指摘したことを強く裏付けてくれるとらえ方であり，核心を突いた言葉であると受けとめることができる．同様の指摘は村瀬（1999）[61] の「人のこころの深層に触れることに畏れを知る謙虚さ」という言葉にも，青木（1999）[62] の「相手を対等な人間として遇するという態度」にも見ることができる．「臨床」的関係は最初からあるものではなく，関係のあり方，向き合い方によって創造されていくものである，ということを強く心に留めておくべきであることが改めて示唆されたと思われる．

中村（1992）の説く前記の「臨床の知」に立った時，Aさんという人の「在り様」[63]（Aさんという人と他の人とのかかわり）をどのようにとらえたらよいか．筆者なりに整理してみると，次のように言えるのではないかと考える．

①Aさんという，世界にたった一人しかいない人が，さまざまな経験を積み重ねながら，特定の場と空間―つまり，Aさんの世界―の中で，Aさん自身の（独自の）人生を生きている．

②Aさんには多くの側面があり，同時にさまざまな特徴（見方や感じ方など）を備えている．

③そういうAさんにかかわる人のさまざまな特性やかかわり方の質等に応じて，Aさんのさまざまな姿が表出される．

要するに，「人間同士の思いやり」の上に立ち，「人格的な主体同士の関係」[64]として人と人との関係をとらえることが，「臨床」的なとらえ方として重要な意味をもつということになるであろうか．

２．「その人の息づく姿に直接関わって」，「その人の息づく姿」の「事実（実態）」[65]を感じ取らせてもらうことに努めることが重要である．

Aさんに「まみえる」ことができるためには，Bさんには人間としての相応の礼儀作法（マナー）が求められる，ということを先達の指摘を引用させてもらいながら，上で記した．「クライエントを援助する関係の質ということの根底にある」のが，「セラピスト」が「自分のほうに人間らしい気持ちを向けてくれているという漠たる感覚」を「クライエント」が感じることができるということであると，岡（2004）[66]も指摘している通り，人は自分が目の前の人に，人として厚くもてなされているという感じをもてないときにはその人に対して心を開くことは難しいということである．（このことは，おそらく誰もが日常生活において実感していることではないだろうか．）「臨床」あるいは「臨床」的関係はこのような感覚のないところには創造されないと言ってよいであろう．「心理臨床」「教育臨床」「発達臨床」などの「臨床分野（領域）」に携わる者にとっては，このことは特に心に留めておかなければならないところではなかろうかと，筆者は常々感じさせられている．

さて，「その人の息づく姿に直接関わって」，「その人の息づく姿」の「事実（実態）」を感じ取らせてもらうためにはどのようであったらよいのであろうか．筆者はそのうちの大切なことの一つとして，「その人」に向き合う（「まみえる」）人の「聴く力」ということをあげてよいのではないかと考えている．

「その人」に向き合う（まみえる）人に，どうして「聴く力」が重要であると考えられるのであろうか．あるいは，「聴く力」とは，そもそも「何を」「聴く」「力」のことなのであろうか．

「聴く」とは，佐治ら（1999）[67] によれば，「積極的な行為，すなわち，相手を分かろうとする働きかけとして行」われるものであって，「そのひと（person）に焦点を合わせ，相手そのものを聴く」ことであるという．

また，半田（2007）が子どもと教師との「かかわりの基本」について述べていることは，この項のテーマについて考えていくにあって大きな示唆を与えてくれるように思われる．つまり次のようなことである．教師が子どもの側にいて，「子どもと同じものを同じように見ようとする」とき，子どもと教師の「かかわりの基本」が作られる．[68]

筆者自身も教師と子どもとのコミュニケーションについての調査研究から，同様のことを感じている．つまり，「子どもの側に立って考えた場合，やはり必要なのは，教師がみずからの身を屈め，自分と同じ目線に立って優しく丁寧に応対してくれていることを子ども自身が感じ取れてこそ，（中略）自分という存在をしっかりと受けとめてもえらえたという感じになり，（中略）こころの扉が開かれていく」ということである．[69]

以上のようなことから言いうることは，「その人の息づく姿に直接関わって」，「その人の息づく姿」の「事実（実態）」[70] を感じ取らせてもらうためには，「そのひと（person）」「そのものを聴く」[71] という姿勢に立ち，「みずからの身を屈め」[72] 「同じものを同じように見ようとする」[73] ことが大切になってくるということであろうか．このような姿勢に立ってはじめて，今，自分が向き合っているその人の「思い」や「願い」など（「ニーズ」という言葉で言い換えてよいと思われるが）を幾分なりとも感じ取らせてもらうことができるようになると言えるかもしれない．[注5]

Ⅴ　終わりに ― 今後の課題も含めて ―

「臨床」という言葉が，医学以外の分野（領域）でも，近年よく用いられるようになってきているが，そこで用いられている「臨床」という言葉の意味や使われ方の厳密さ等には，分野（領域）によってかなり幅があるように見受けられた．
そのような状況の中にあって，相当厳密な定義づけの上に立って用いられている思われる分野（領域）もある．たとえば，心理臨床等の分野（領域）などはその代表例である．[(74)(75)]

さて，それはそうとして，筆者自身も「臨床」という語を冠する分野（領域）（臨床心理学，臨床発達心理学，教育臨床など）にかかわってきている．このことから考えると，筆者自身，みずからの「臨床」の足場をしっかり固め，まなざしを向けるところをはっきりとさせておくことは，自分自身の「臨床」活動をより確かなものとするためには不可欠の課題である，ととらえている．その意味からも，この「臨床」という言葉の意味するところを筆者は筆者なりにより深く考察しておくことが，筆者自身に課せられた大事なテーマでもあると思われた．その点から言えば，本論は私的な動機づけに促されてスタートしたものと言ってよい．

しかし一方では，これは筆者ひとりに課せられた課題というよりも，「臨床」にかかわる人すべてがそれぞれに考察を深めていくべき普遍的な課題であるようにも思われる．その意味では，普遍的な意味をもつ課題に対する一研究者としての取り組みでもあったと言えるであろう．

以上のような認識の上に立ち，本論文では，この「臨床」という言葉を構成する「臨」と「床」という語の持つ語源的意味をたずね，これらの語の持つ意味を手がかりに，「臨床」という言葉の意味についての考察を試みた，こうした面からの考察を行うことを通して，筆者自身，これまで気づかずに（見過ごして）いた大切なことの数々を教えてもらうことができ，「目から鱗が落ちる」思いであった．その具体的な内容は，本文中に記したとおりである．筆者のこれからの「臨床」活動に強固な足場と明確な方向づけを与えられたと考えている．

今後は，具体的な事例についての検討の中で，今，自分が出会っている（向き合っている）その人のさまざまな「思い」をしっかりと自分の心に「見てうつす」[76] 体験をさらに重ね続けていくことを心がけたいと考えている．こうしたことを通して，「臨床」という言葉（事柄）のもつ意味について一層の考察を深めていくことが求められていると思われる．

文　献

（1）大塚義孝「臨床心理学の成立と展開 1 ― 臨床心理学の定義」（大塚義孝編著『心理臨床学原論』誠信書房，2004年，pp.22-23
（2）澤田瑞也・小石寛文・佐々木正宏著『こころの発達と教育臨床』培風館，2001年など
（3）氏原寛他共編『心理臨床大事典』培風館，1992年など
（4）麻生武・浜田寿美男編『よくわかる臨床発達心理学』ミネルヴァ書房，2005年など
（5）藤原勝紀「臨床心理学の方法論」（氏原寛他共編『心理臨床大事典』培風館，1992年，pp.13-17
（6）（1）に同じ．
（7）（5）に同じ．
（8）（1）に同じ．Pp.23-24
（9）（5）に同じ．
（10）（5）に同じ．
（11）（8）に同じ．
（12）（5）に同じ．
（13）（8）に同じ．
（14）（5）に同じ．
（15）（8）に同じ．
（16）（5）に同じ．
（17）（8）に同じ．

(18) ホアン・M・サンチェス＝リベラ「実存的対話」(ハイメ・F．カスタニエダ・井上英治共編『人間学入門』理想社，1975年，P.121)
(19) (18) に同じ．P.136
(20) (８) に同じ．
(21) J.M.Hawkins (compiled) “The Oxford Paperback Dictionary (3rd ed.)” Oxford University Press，1988，p.148
(22) 三省堂編修所編『最新コンサイス英和辞典』三省堂，1966年，p.206
(23) 影山誠一・新垣淑明監修『新漢和辞典』緑樹出版，1993年，p.659
(24) 上田万年他編『新大字典』講談社，1993年，p.1921
(25) 白川静『字通』平凡社，1996年，p.1630
(26) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典（第二版)』第12巻，小学館，2001年，p.507
(27) (23) に同じ．P.266
(28) (24) に同じ．P.758
(29) 長澤規矩也編『明解漢和辞典』三省堂，1959年，P.279
(30) (29) に同じ．P.67
(31) (29) に同じ．P.320
(32) ジョン・ボウルビイ著 (二木武監訳)『母と子のアタッチメント―心の安全基地―』医歯薬出版，1993年，Pp.177-202
(33) マルティン・ブーバー著 (植田重雄訳)『我と汝・対話』岩波書店，1979年，Pp.162-163
(34) (33) に同じ．Pp.160-163
(35) (33) に同じ．P.163
(36) (18) に同じ．Pp.121-122
(37) (33) に同じ．P.184
(38) サン・テグジュペリ著 (河野万里子訳)『星の王子さま』新潮社，2006年，P.108
(39) 栗原輝雄著『特別支援教育臨床をどうすすめていくか―学校臨床心理学の新たな課題―』ナカニシヤ出版，2007年，Pp.63-64，80-81

(40) 栗原輝雄著『生きることについて―さくらとはこべ，どちらがきれい？―』近代文藝社，1991年，P.42
(41)（1）に同じ．P.24
(42)（18）に同じ．
(43)（23）に同じ．P.659
(44) 神田橋條治著『追補精神科診断面接のコツ』岩崎学術出版社，1994年，P.56
(45) 新村出編『広辞苑（第三版）』岩波書店，1983年，P.236
(46)（23）に同じ．P.343
(47)（23）に同じ．P.659
(48)（5）に同じ．
(49)（1）に同じ．
(50) 椋鳩十著『感動は心の扉を開く―しらくも君の運命を変えたものは？―』あすなろ書房，1988年，P.55
(51) 島崎敏樹著『生きるとは何か』岩波書店，1974年，P.57
(52)（32）に同じ．Pp.1-24
(53) 増井武士著『不登校児から見た世界―共に歩む人々のために―』有斐閣，2002年，Pp.43-56
(54) 山本光男訳『イソップ寓話集』岩波書店，1982年，P.70
(55)（39）に同じ．Pp.83-86
(56) 栗原輝雄「特別支援教育における実践と支援の基盤についての一考察―障害のある子とその保護者の「思いに寄り添う」ということについて―」皇學館大学教育学部研究報告集第5号，2013年，Pp.15-34
(57) 中村雄二郎著『臨床の知とは何か』岩波書店，1992年，P.9，135
(58)（23）に同じ．
(59)（57）に同じ．
(60) 岡村達也・飯渕久美子「プリセラピー―パーソン中心療法の第一条件（心理的接触）をめぐって―」（村瀬孝雄・村瀬嘉代子編『ロジャーズ―クライエント中心療法の現在―』日本評論社，2004年，P.56

(61) 村瀬嘉代子「心理療法と支持」こころの科学，第83号，1999年，P.11
(62) 青木省三「『支持的心理療法』をめぐって」こころの科学，第83号，Pp.21-22
(63) (57) に同じ．P.134
(64) (57) に同じ．P.202
(65) (１) に同じ．Pp.23-24
(66) 岡昌之「クライエント中心療法と統合失調症」(村瀬孝雄・村瀬嘉代子編『ロジャーズ―クライエント中心療法の現在―』日本評論社，2004年，P.153)
(67) 佐治守夫・岡村達也・保坂亨著『カウンセリングを学ぶ―理論・体験・実習―』東京大学出版会，1999年，P.14
(68) 半田一朗「同じものを同じように『ともに眺める関係』」月刊学校教育相談，2007年5月号，Pp.20-29
(69) 栗原輝雄「幼児児童生徒とのコミュニケーションおよび教育（保育）・発達支援の基盤としての教師の『聴く力』について―教師を対象とした『聴く力』についての調査から―」三重大学教育学部研究紀要第59巻（教育科学）2008年，Pp.217-231
(70) (１) に同じ．Pp.23-24
(71) (67) に同じ．
(72) (69) に同じ．P.227
(73) (68) に同じ．
(74) (５) に同じ．
(75) (１) に同じ．
(76) (23) に同じ．P.659

注

(注１) 繰り返しになるが，本章の冒頭で記したように，英語の“clinical”が「臨床の」という日本語に翻訳されたさい，「臨床」という語を構成する「臨」と「床」という文字の意味についての考察も含んだ上でのことであれ

ば，事情は異なってくると思われる．残念ながら，筆者はこの点についての事情（経緯）の詳細が把握できていないので，このようなとらえ方で考察をすすめていくことをお断りしておきたい．

（注２）サン・テグジュペリ著（河野万里子訳）『星の王子さま』（文献（38））の中に記されている「キツネ」と「王子さま」との初めての出会いのさいに「キツネ」が「王子さま」に語った言葉は，ここに記したことを裏打ちしてくれていると思われる．「友達をさがしている」と語る「王子さま」に対する「キツネ」の答えは，そのためには「『絆（きずな）を結ぶ』ということだ」というものであった．「絆（きずな）を結ぶ」ためには時間をかけて徐々に距離を縮めていくことが大切だ（「がまん強くなること」）と説く．そして，「絆（きずな）を結ぶ」ことができたなら，「ぼくを巣（す）の外へいざなう」と言う．（文献（38），Pp.99-103）これらの言葉は，人が人と「出会い」，「つながり」，「理解しあう」ようになっていくための大切な内容を示唆していると考えられる．

なお，「絆」には「ひっぱるつな」「物をつなぎとめるもの」等の意味があるという．（影山誠一・新垣淑明監修『新漢和辞典』緑樹出版，1993年，P.614）人と人とが離れることなく「近づき合う」という状況を思わされて，意味深い．

（注３）文献（23）参照．

（注４）「臨」には「見てうつす」という意味のあることが，文献（23）に示されていると本文に示した．この「見てうつす」ということに関連して想起されるのが，書の分野で用いられている「臨書」という言葉である．「臨書」とは，「手本を脇に置き，その字形や筆使い，字配りや全体の気分をまねて練習すること」で，その一つに「手本の意（こころ）に重きを置き表現する意臨という方法がある」という．（角井博「意臨」，小松茂美編『二玄社版日本書道辞典』二玄社，1987年，P.34）この「意臨」という方法を，人と人との間のコミュニケーション関係に置き換えて考えてみると，次のように言うことができるように思われる．つまり，今，自分が向き合っているその人の心の世界（上記の定義の中で用いられている言葉でいえば，「手本」―「見てうつす」さいのもとになるもの―ということにあたると

言えるであろうか）を，その人の言葉や声の調子や，表情やしぐさ・動作等々の目に見える部分を通して，みずからの「心に感じ取る」ということを意味しているように思われるということである.「臨書」の方法と「聴く」ということ，その間の深い関係について気づかされた思いがした.

（注５）このようなことを通じて，今，自分が向き合っている人と真の意味で「共に生きる」関係（小沢牧子「生活者として日常の差別をどう乗り越えるか」日本臨床心理学会編『心理治療を問う』現代書館，1985年，Pp.378-394),「いっしょに悩み考え合う」(小沢牧子著『「心の専門家」はいらない』洋泉社，2002年，P.216）関係が深まっていくということになるのであろう．その意味で，今，目の前にいる人，自分が向き合っている人の心の世界を,「無限の思いやり」(小西忠正「心の生理」現代のエスプリ，No.59，1972年，P.71）をこめて，できるだけ丁寧に「見てうつす」(文献(23)）ことができるように，自身の内面を成長させていく（耕していく）努力を怠らないように努めること.(大変難しいことではあるが.）それが「臨床」ということの強固な基盤を形成していくと言えるかもしれないし，そのようななかで，さまざまな技法が真の意味で生きてくる（意味をもってくる）と言えるのではなかろうか.（文献（５）参照）また，みずからの保育実践をふりかえり,「人が人と具体的な時空を互いに支え合いながら生きるということ自体が，保育臨床の本質である」とし,「臨床」とは「共に生きるという在り方」であると述べている大場（2007）の所論（大場幸夫著『こどもの傍らに在ることの意味―保育臨床論考―』萌文書林，2007年，P.125）は，切り口は異なるものの，筆者のこれまで述べてきたことと重なるところが多く，示唆を受けるところが大きいと筆者は考えている.

最後に,「臨床的関係」と技法あるいは技術との関連についてふれてみたい．中村（1992）によれば,「技術」は「主体あるいは自己の，他者や世界に対する関わり方」であるが,「媒介的なもの」であるとされ（文献（57)，P.71),「技術」には「認識し開明すること，覆いをとること」の意味があると説明されている.（文献（57)，P.73)「心理臨床」や「教育臨床」,「発達臨床」等における「技術」が真にこのような意味をもち，有効な働きをす

るためには，本文中に何度も記したような「まみえる」姿勢（「臨床的関係」）（「Ⅲ「臨床」という言葉についての筆者の考察」参照）が存在してこその話であることが，やはり大事な前提であり，不可欠の要件であることを筆者としては考えるのであるが，いかがであろうか.